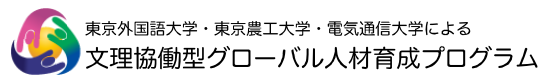




# 貧困、飢餓、農業開発



「貧困」(絶対貧困)の特徴の1つに、「栄養不足により、生活さらには生存さえ困難になっている状態」、飢餓があります。現在、世界の人口は約74億人ですが、その11%にあたる約8億2千万人が飢餓に苦しんでいます。これは、世界の全人口を養える食料が生産されていないためでしょうか？ 世界人口は今後も増えていき、かつ平均的な所得水準が向上していくと予測されています。将来、人口増大ならびに所得増加に伴う動物たんぱく質消費の増加ペースに歩調をあわせて、十分な食料が増産され続けなければ、地球規模での食料不足、飢餓人口の増大は避けられません。地域性に着目しながら、貧困と飢餓、食料の生産と分配の実態、そして次世代の農業生産の行方について考えてみましょう。

## 飢餓と肥満の並存

現在、地球上に住んでいる100人のうち11人が飢餓状態にあります。皆さんの周りを見わたしてください。飢餓で苦しんでいる方はいますか？ むしろ中高年齢層の過食による肥満や成人病の方が身近な健康問題になっていると感じませんか？ 実は、現在、世界の肥満人口は約6億4千万人と推測されています。現代社会では、飢餓と肥満、栄養不足と栄養過多(過食)が並存しているのです。世界の全人口を養う食料が生産されていても、各人の食料消費において大きな格差が存在します。平易に言えば、パイは十分大きいにもかかわらず、パイの分け方が適切でないゆえに生じる分配の問題です。この背景には、地域間/諸国間の経済格差(富める国と貧しい国)や国内の経済格差(富裕層と貧困層)などの経済問題、紛争などの国際政治問題、都市生活におけるストレス増大などの社会問題が複雑に絡み合っています。

## 世界食料生産の動向と地域間の農業生産性格差

第二次世界大戦以降、世界各国で工業化とともに食料増産に力が注がれました。その結果、図1に示されるように、世界の穀物生産量は人口の成長率を上回る速度で増大しました。持続的な穀物増産は、主に単位面積当たり収量(単収＝土地生産性)の増加によって達成されました(図2)。単収の増加は、農業研究・開発や農業生産インフラへの投資及び農業技術の発展の成果といえます。同じ流れの中で、中米・アジア諸国では、“緑の革命”が達成されました。

しかし、穀物の単収増加の推移には地域間で大きな差がみられます。図3におけるアフリカや貧困国(サブサハラアフリカまたは南アジアの国々)の推移に注目してください。結果として、人口一人当たり穀物生産量の地域間格差は拡大している傾向にあります(図4)。そして、そうした地域で飢餓の発生が大きくなっている現実があるのです。

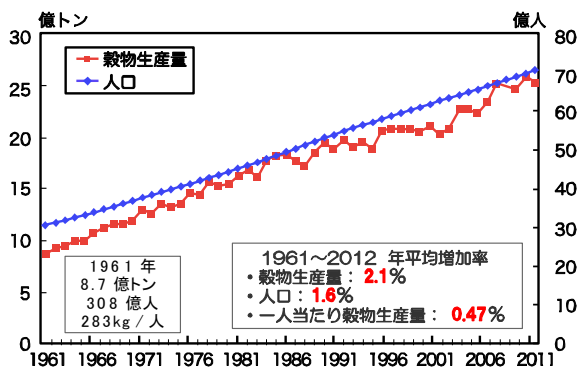


図1 世界穀物生産量の推移

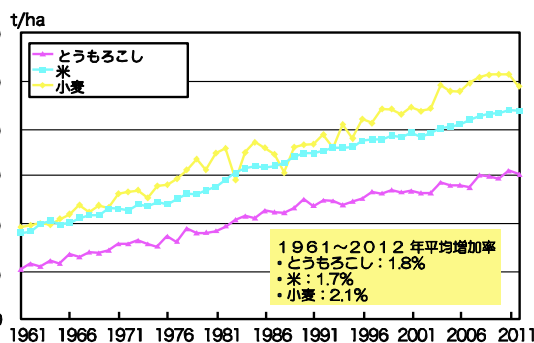


図2 三大穀物単収の推移

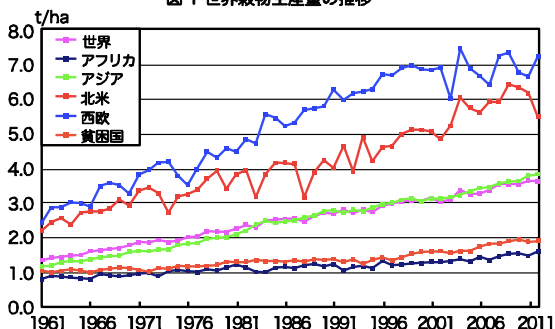


図3 地域別穀物単収の推移

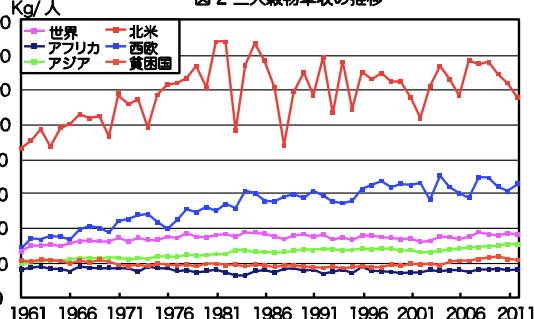


図4 地域別一人当たり穀物生産の推移

データ 出所先: FAOSTAT

## 考えてみよう

- ✓ 20世紀後半以降の穀物の単収増加に貢献した、農業研究・開発や農業生産インフラへの投資及び農業技術の発展とは、具体的にはどのようなものだったのでしょうか。
- ✓ なぜアフリカでは穀物単収が低い水準にとどまっているのでしょうか。増加させるには何が必要でしょうか。
- ✓ SDGsの1つである飢餓撲滅 (Zero Hunger) を達成するにはどのような対策が有効になりうるのでしょうか。